

ギザのピラミッド

この2月エジプトを訪問、今その風化と崩壊の危機が話題になっているピラミッドとスフィンクスを訪れ、さらに古代からの歴史を映してきたナイル川をクルーズ船で上りました。今回は、その旅の中からいくつかのエピソードをご紹介します。まずはギザのピラミッド訪問から――。

カイロ市街から車で約20分。やや小高い砂漠の丘陵に三つのピラミッドが見えてきました。クフ王、カフラー王、メンカウラー王のピラミッドです。そして、カフラー王のピラミッドの正面には、4千年の歴史を見つめてきたスフィンクスが、今も視線を遠くに投げかけていました。頭は人間、身体はライオンの人面獣身。でもその鼻は削られ、アップで写した顔の相当部分が風化しているのがわかります。日本出発の前日、たまたま朝日新聞の夕刊がスフィンクスの危機を報じていました。時の経過と、気温の変化、周囲の人間が発する空気の酸化が崩れをもたらしている、といいます。「あと100年で頭が崩れ落ちる！」――そんな報道も決して誇張ではないと思われる状況です。像の片側には、やぐらが生まれ補修作業が行われていました。夢の世界遺産の保全をなんとかしてほしいものです。

クフ王のピラミッド。1個が平均2.5トンという巨石が230万個も積み上げられ、頂上まで続いています。メキシコのティオティワカンのピラミッドは、人間が頂上まで登れる石の階段がありました。でも、ギザのピラミッドに登る道はなく、その急勾配は登ろうとする人間を寄せつけません。

4千年以上も前に、なぜこんな巨大な建造物を作ったのでしょうか？今日までさまざまに議論されてきました。以前から「王の墓」との説がありましたが、その遺体・ミイラもまだ発見されていません。かといって、「墓ではない」と主張する根拠もない。やはり「王の墓」との説が現在のところ有力。そしてその工事は、「奴隷による強制労働」という説から、ナイル川の氾濫期に農業ができない人のために行われた公共事業だった、との説に移りつつあるようです。何事も強制された労働よりも、自分が役に立っている、何かを創造している、といった喜びから出た労働の方が、出来上がったものは輝きを増すものです。幾何学模様のみごとな作品群を見て、私もその説に同感したものでした。

三つのピラミッドが見える展望台へと足を運びました。砂嵐が吹く大地からは、500mほど遠方に、カフラー王のピラミッド、その左にクフ王、右にメンカウラー王のピラミッドが順序よく並んで見えます。観光客のグループがピラミッドをバックにあちこちで記念撮影をしていました。と、面白い光景に出くわしたのです。

30人ほどの男女の若者が3段ピラミッドを組み上げ、歓声を上げながら写真を撮っていたのです。古代の“石のピラミッド”の前で、現代の“人間ピラミッド”。これは面白い！興に乗って私も撮影班に飛び入りし、シャッターを押しました。そして一番上に乗った女の子に声をかけてみたのです。

「どちらのお国からですか？」「皆さんは高校生、それとも大学生？」

ピラミッドから降りると満足そうな笑顔で彼女は言いました。

「スイスからよ。私たち高校生。修学旅行で来たの」

朗らかで明るく歯切れがよい。日本でも教科書に出てくるピラミッド。きっと世界中から訪ねてくる中学生や高校生も、この古代遺跡の前で、同じようなアクションを起こしているかもしれません。

ナイル紀行

早朝 6 時、カイロの国内空港から 80 人乗りほどのジェット機で出発、砂漠の上空を一路南へ、中流のルクソールを目指して飛びました。

ルクソールの空港からはまずカルナック神殿へ。古代エジプト最大規模の遺跡です。高さ 15m 前後、直径 3m ほどの石柱が 137 本。うち 12 本は 23m もの高さ。ラメセス王の巨大な石像があちらにもこちらにも。なぜこんな砂漠に神殿を作ったのか。何のために、どれだけの巨費と人間がかかって建造したのだろうか。当時の王家、臣民の生活に思いがいたされてきます。

それにしても、なんと大勢の観光客（とはいえ自分たちもその一部なのですが）。ガイドに引率されたグループが、あちこちで円陣を作って説明を聞いています。カメラを構え、ビデオを回しながら歩く人々。石柱と石柱の間はまさに“銀座通り”。大型観光バスが 40 台を超すであろう大駐車場から流れ出てくる人の群れは切れることがありません。

正午過ぎ、クルーズ船に乗り込みました。「ソネスタ・セント・ジョージ・ナイル・クルーズ」号。船長 72m、船幅 15m、乗客 118 人。私たちの船室は 5 階建てづくりの船の 3 階。部屋には風呂・トイレも完備しホテル並みになっています。1 階は広いレストラン、2 階は船への乗降口があり、ショーや船客が踊れるようになった舞台とゆったりとしたラウンジ、3・4 階が客室と展望室、5 階は甲板でプールや飲み物のコーナーがあります。タイタニックの小型版を想像させるような船内。こうしたクルーズ船が下流から上流までナイル川全体で約 300 隻航行しているといいます。

中流のルクソールから上流のアスワンまでの約 320 キロを、史跡のある地に停泊しながら時速 15 キロで航行。船の広報担当者によると、乗船客の上位 10 傑は：日本、アメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリス、スペイン、メキシコ、ブラジル、チリ、そして地元エジプトだといいます。

ほとんどの乗務員が、我々に会うとカタコトの日本語で話しかけてきました。「オハヨゴザイマス」「イッテラッシャイ」「アリガト」……。レストランで朝食の際には、特別メニューとしておかゆと味噌汁まで用意してくれたのです。

「ドカン、ドカン」——どこかにぶつかるような音がして船が動き始めました。1 階の船内レストランで昼食をしている窓の向こうに波しぶきが立っています。食事を終わって甲板に出てみました。川幅は 200m から 500m。古代文明を育んできた“母なるナイル”。雲ひとつ見えない空。強い“真冬の太陽”で水面はキラキラ鏡のように反射。兩岸の景色が

移り変わっていきます。沿岸には椰子、バナナ等の熱帯樹。「鮮やかな緑」と言いたいところですが、どの木も灰色か土色がかっています。砂漠の砂ぼこりを被っているからです。

この緑の帯の幅は数百メートルでしょうか。その向こうにはががとした低い山並みが続き、断面の一部はアメリカのグランドキャニオンを思わせるように、切り刻んだ地層をむき出しにして川に迫っています。

午後3時。何隻ものクルーズ船が下流へと行き交っていきます。目の届く範囲の上流に4隻、下流には5隻の船が私たちの船と同じ速さで上流に向かっていきます。

長さ70m、幅15mのデッキ。緑のジュウタンの上に大型のパラソルが10本。100人あまりを収容できそうなテント屋根の下にはいくつものテーブルと大型のリラックスチェア。前方には15mほどの長さのプール。その周囲には甲羅干し用の長いすがズラリと並んでいます。

2月。北半球は真冬。水着だけになった女性客が白い肌をさらしています。“少しでも太陽を浴びたい”という北の国からの訪問客なのでしょう。パラソルの下で本を読みふける男性。デッキの端でビデオカメラを回している人。テーブルを囲みいつまでも談論を続けているグループ。甲板にもBGMが静かに流れています。

途中でヨット船に会いました。デッキから手を振る人、カメラを向ける人。相手のヨットからも手が振られています。そこには、忙しい日常生活とはまったく別の世界がありました。我が68年の人生でも初めてです。

「こんなぜいたくな時間を過ごしているのかな？」との思いもときおり脳裏をかすめました。でも「いやいや、長い人生で、ときには厳しい、大変な場面を乗り越えて、これまで頑張ってきた自分へのご褒美と考えてもいいんじゃないか」と自らに言い聞かせたものでした。それに、こうして写真を撮ったり原稿を書いたりしているんだし・・・と。

さて次回は、水門の通過、アスワンハイダムと湖底に沈みかけた世界遺産、現地の人々との交流のエピソードのいくつかをご報告しましょう。